宇野浩二全集

第十二卷

宇野浩二全集　第十二卷

定價一五〇〇圓

昭和四十八年三月十日印刷
昭和四十八年三月二十日發行

著者　宇野浩二

發行者　山越　豐

印刷者　白井倉之助

發行所　中央公論社

東京都中央區京橋二―一
電話（五六一）五九二一
振替東京三四

©一九七三　檢印廢止

宇野浩二全集　第十二卷

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目次

震災文章　七
蒲團の中　三四
質屋の小僧　四四
質屋の主人　五〇
思出話　五三
遠方の思出・　六〇
三田派の人々　一〇二
二つの會　一一一
大阪　一三三
晩秋三日　一六八
文學の三十年　一七七

御前文學談　三一九
世にも不思議な物語　三四一
當て事と褌　三九八
忘れ難き新中國　四一八
晩秋の九州　四三一
年譜　四四九
主要著作年表　四六七
主要著書目錄　四八〇
あとがき　四九九

隨筆

震災文章

九月一日・二日（その一）

階下の間で私は着物を着更へてゐた、その時まで私は寢間着で細帶を締めたまゝだつたので、細君が私の帶を取りに二階に上つてゐた、そして私が取敢へず古い着物を脫いで、新しいのと更へようとしてゐた時だつた。唯ならぬ物音と動搖とが起つたのである。それは、無論、咄嗟に地震――而も尋常のでないと感じたので、私は着物の袖に片手を通したまゝで、二階に駈け上つた。梯子段を上つたところで細君と顏を合はした。それから何分間かの間、地震は少しも勢を弛めなかつたが、私はこれは一昨年の暮と去年の春とに二度遭つた强震よりもつと强い性質のものだなとは思つたが、多分天井が私たちの頭の上に落ちて來るやうにはならないだらうと思ひながら、柱と簞笥の一角とを兩手で角力を取るやうな姿勢で支へてゐた。

私は不斷友達仲間から臆病者の標本のやうにいはれてゐるもので、現にこの震災の後、人々は私が助かつてゐても、多分腰ぐらゐ拔かしてゐるだらうと取沙汰してゐたさうである。そして又私自身も平生から人並外れた臆病者であると覺悟してゐた。が、今度私が知つたことは、これ程の大難に際すると、大抵の臆病者も大抵の勇者も大差のない氣持にまで一致するといふことである。それでこそ年頃になれば山の男も、海の男も、町の人間もみんな同じ聯隊の兵隊になることが出來る譯であらうか、そして一旦緩急あれば砲煙の中に身を曝すことも出來る譯であらうか。

「あなた、あなた、どうしませう、大變ですね、」とその時細君が私と並んで矢張り一本の柱をつかまへながら叫んだ。「どうしませうツて、仕樣がないよ、」と私はがら〳〵搖れる柱と簞笥とを兩手で突つ張りながらいつた。「然し、大丈夫だよ、大丈夫だよ。」

「母さん、母さん！」と細君は、階下の間にゐる母に向つて叫んだ。が、不斷から耳の遠い彼女に、殊にさういふ騷動の最中に、それが聞える筈がなかつた。

「駄目だよ、駄目だよ、今呼んでも、」と私は矢張り搖れる柱を支へながら彼女を制した。「仕方がないからお互に落着

け、落着け。」

その瞬間震動が息するほどの間緩まつたかと思へた。

「逃げませうか、」と細君がいつた。

「待て、もう少し、」と私がいふ間もなく、もう一度激しい震動がつゞいた。

そして、それが終つてから、幸ひ私たちの家は潰されなかつたので、大急ぎで私は細君と共に階下に下りて、茶の間のところでぼんやりと突つ立つてゐた母と女中とを誘うて、戸外に飛出したのである。

しかし、考へて見ると、恐らくその時までの私は夢中だつた、何故といつて、私が何とも名狀し難い、胸を締められるやうな物恐ろしさ、物凄さを感じたのは戸外に出てからであつた。見ると、各々の家の人たちがそこに不安極まる顏をして一齊に飛出してゐた。私たちの家のあるのは主に二階建の庭の少ない屋敷町である上に、町幅が狹いので、それ等の人々は一度に大通へ出る町角へと走つて行つた。私たちも走つて行つた。そしてその間も第二、第三の可成り激しい物音と震動との搖り返しがつゞくのである。さて、大通といつても餘り廣くない四つ辻のことなので、そこに集まつて來た人々は、その四つ辻のなるべくまん中のところに肩と肩と、腕と腕とを擦れ合つてかたまつてゐた。それ等の人々の目は一齊に搖れてゐる屋根の方を見てゐた。ゴーツと地響がして來る。「來たぞ！」と群集の中の者が口々に叫ぶ。すると、忽ち私たちの立つてゐる大地が搖れて、四つ辻に面してゐる家々ががた〳〵と鳴る。その時の、いはうやうない物凄い天災に對して、無力な人々の心が一つになつて慄へてゐた光景を私は忘れることが出來ない。

その時に、群集の中の誰が初めともなしに、「火事だ、」といひ出したものがあつて、見ると西の方、本郷の臺に盛んな煙が上つてゐた。それは帝國大學が燃え初めたのだつた。然し、私たちはその時は未だこの火事がそんなに恐るべきものを持つて來るとは思ひも及ばなかつた。が、それからものゝ三十分と經たなかつた時に、

「あゝ、凄いな、彼方でも此方でも火を出してゐると見える、」と誰かゞいひながら空を見上げた。

太陽が中空でまん丸く眞赤に見えた。

「地震の時はよくお天道樣が眞赤に見えるといふが、これだな、」と誰かゞいつた。

つまり、いつの間にか、私たちの見る空の半分位もが煙になつてゐたのだ、そして、その煙を通して見える眞赤な太陽が次第々々に薄くなつて行つて、間もなく見えなくなつた。それ程煙が濃くなつてしまつたのである。だが、その時も未だ私は火事がそんなに東京を荒れ狂つてゐたとは想像して見なかつた。それよりもその間中絶えず地響して搖れて來る地

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

震の恐ろしさで頭の中が一ぱいだつた。そして、それは少しづゝ緩慢になつて行くとは思へたが、とてもその不安さに堪へられなかつたので、外の人たちと一緒に近くの寛永寺の境内に避難することにした。

行つて見ると、そこにはもう大勢の人々が彼方此方の木蔭を中心にして、莫蓙や、蒲團や、傘や、手廻りの荷物を持出して、避難してゐた。空の煙は眞白なのや、茶つぽいのや、渦卷いてゐるのや、幕を張つたやうなのや、高いのや、低いのやで、殆ど晴れた日なのか、曇つた日なのか辨別がつかない程であつた。唯、煙のない西北の空を見ると、一點の雲もない青空なので、晴天に違ひないことが察しられた。

そして四時頃になつた。地震の起つたのは正午頃であつた。その時分になつて、私たちの避難してゐた寺の境内に、私たちの町内の者でない、遠くから逃げて來たものらしい、いづれも出來るだけの荷物を、或は車で或は背負つて持つた、しどろもどろの恰好の人たちが續々と避難して來た。それ等はすべて淺草區の住民らしかつた。そしてその人たちの口から下町に大火が起つてゐることを私たちは知つたのである。

だが、その時は私は未だ吉原から淺草にかけて、十二階が折れたといふ話などを參考しながら、淺草公園の方にかけて燃えてゐるのだらう位に思つてゐた。が、その間にも空を掩うてゐる煙の幅がだん〳〵廣くなつて行くので、私は一人で様子を見る爲に上野公園の鶯谷の方へ出る道を歩いて行つた。が、その時は淺草の方から避難して來る人々の群集で、彼等に逆らつて歩くことが出來ない程そこへ行く道が混雜してゐたので、曲つて、兩大師前の方へ出て見た。そしてそこから見下ろした火の海の光景には、文字通り呆然として突つ立つてしまつた。あそこの高臺から見渡される限りの下町一面が悉く火に包まれてゐた。

その晩は、私たちは寛永寺の境内で野宿することになつた。私たちといふのは、私の友人で神田の小川町で開業醫をしてゐた上村誠一君の燒け出された一家と、同じく燒け出された妻の緣類に當る淺草の鷄卵問屋の一家と、その鷄卵問屋の親類になる本所の寫眞材料屋の一家と、合計四家族であつた。私たちは夜中にも時々襲うて來る地震の爲に幾度目を醒まされたか知れなかつた。それは第一回の時から思ふとずつと緩慢になつたとは思へたが、然しその第一回の大地震の記憶の爲に私たちは一層臆病になつてゐた。實際、自分の寢てゐる莫蓙一枚下の大地が妙なうなり聲と共に震動してゐるのを感じることは、理窟なく物凄かつた。空を見ると、その晩の私たちの屋根の代用を勤めてゐた木々の梢を透かして、きら〳〵と星の輝いて居るのが見られた。だが、別の空の半分は火事の焰で眞赤に彩られてゐた。私は地震に起されて、少しでも心が不安に重くなつて來ると、そつと立ち上つて寺の

境内を散歩して廻つた。すると、午前一時の頃でも、二時の頃でも、或は明け方の時でも、寛永寺の前の通から、境内への門の出入口から、人々の眞黑な頭と、提灯と、車との密集が祭の時のやうに動いてゐた。そして、見る見るうちに、境内の私の散歩區域が狹められて行つた程、空地といふ空地が避難民の一族の野營の場所に變つて行つた。それ等の莫蓆とか、古蒲團とかの上には、晝間の疲れと心配とで、男や女やが牛のやうにごろ〳〵と横たはつてゐた、だが、無論誰も熟睡してゐるやうには見えなかつた。そして、二日の夜が明け放れた。

この日の私たちの心配は下町の火災が中々鎭まりさうに見えないことであつた。そればかりでなく、人々の噂に依ると、私たちの唯一の城である上野の山の麓にあるところの、松坂屋、或は上野停車場、さては岩倉鐵道學校などの大建物が燒けたといふことが、何度報ぜられたか知れなかつたが、私が夕方の五時頃第何度目かに例の兩大師前の廣場に行つた時までは、未だ松坂屋も停車場も岩倉學校も殘つてゐた、それどころか、上野から日暮里へ通じてゐる電車線路の空地といふ空地は、避難の人々と荷物とで一ぱいだつた。松坂屋や岩倉學校が大火の煙を背景にして、どつしりと建つて居る光景は何ともいへぬ心强さを感じさせた位である。

けれども、日が暮れかゝつて來た時、私たちの位置が漸く危くなつて來たことが報じられた。空を飛んで來る火の子が盛んに私たちの頭の上を見舞つて來た。今こそ本當に上野の停車場まで火が來た、松坂屋はもうすつかり燒け落ちてしまつた、この勢で火が山の自治會館に移つたら、もうこの邊は瞬く間だらう、或は又火が池の端を廻つて、七軒町の方に來たら、私たちの方は裏門から襲はれる譯であると傳へられた。そして、その噂と共に、上野の山一面にそれ〴〵假の野營所を設けて避難してゐた人たちの群集が、黑い波のやうになつて、北へ北へと動いて行き出したので、私たちの身邊は再び身動きも出來ない程の混雜を現し出した。寛永寺の門前から一本の通を横切りさへすれば、私たちの家の前に來られるのだが、その通を横切ることが容易でないやうな狀態にさへなつて來た。そして、さういふ中を、私たちも逃げなければならないことになつた。

幸ひなことに、その日の丁度晝過ぎ、室生犀星君と百田宗治君とが私の家の前を通りかゝつて、いふには、あの地震の時まで犀星夫人が產後で神田の病院に入院してゐたので、それを助け出して、前の晚上野で野宿して、これから田端の自宅まで歸るところだ、「どうだ、大丈夫か。若し何だつたら、僕等の方へ逃げて來給へ、」と兩君が勸めてくれた。だが、禮を述べながら、その時はまさか私は田端の方まで逃げるやうな事にならないだらうと思つてゐた。それが、今逃げなく

てはならないことになつたのだ。女たちが騒ぎ出すと共に、私の一旦怯けづいた心持は再び緊張し出した。私はこの際荷物は迚も持出せないと覺悟した。が、暫く火事の形勢を見てからと思つたので、それまでの時間の餘裕の中で、これから冬に向つての必要な物だけ纏めて、それを寛永寺の堂の中に入れておくことにした。私の家と寛永寺とでは半町も間がなかつたが、たとへ私たちの町内が燒けても、若しかするとこの寺だけは免れるかも知れないといふことが十分考へられたからだ。で、その仕事が一應終ると、それ〴〵袷とか、足袋とか、褞袍とか、必要な中でも最も必要なものを、それも斯ういふ非常の場合でない時に女が持ち得る程度の、出來るだけ小さい荷物をこしらへて、それを一つづゝ肩に背負はして、愈々田端の室生君の家に向けて出發することにした。困つたことには、一行の中で、室生君の家はおろか、田端を知つてゐるものが一人もないことだつた。で、私は考へて、ステツキの先に提灯をつけたのを持つて、上村君に先頭に立つて貰つて、私が殿になることにして、その間に女たちと男たちとを適當に配置して、なるべく一列か二列を保つて進行することにした。そして道の曲り角に來ると、提灯をさゝげてゐる先頭の上村君に向つて、殿の私の指圖する聲がとゞくやうにとした。

私はこの十年來、兩國の花火とか、淺草の酉の市とか、さういふ群集の出盛るところへ出かけた經驗を持たないが、この時の上野から田端、飛鳥山へと押し出した群集は、辛うじてそれ等が比較されるだけのものだらう。而も兩側の家々に火は全然點つてゐないし、相變らず時々地震が襲うて來るし、人々の氣持は遊山とは正反對のものであるに違ひなかつた。私は殿に立つて歩きながら、先頭の提灯までの、つまり私の率ゐる人たちの頭數を勘定して見た。女が十人で、男は私と上村の幼兒を合はして七人だつた。私は少し道を遠廻りしても、幾分でも人通りの少ない方へと思つて、天王寺の墓地から一旦は日暮里の方へと二三町進んだが、引返して團子坂を下りて、電車通へ出ることにした。

その時の途で、今でも覺えてゐるのは、あの團子坂の細い道を下り切つて、もう四分の半町ほどで電車通へ出ようとするところの、右側の家が四五軒倒れてゐて、その向ひの左側の、矢張り四五軒の家が往來の方に向つて、六十度位の傾斜で傾きかゝつてゐるところへ出た時のことである。「危いぞ、」「氣を付けろ、」と誰とも知れない、その眞黑な、動いて行く群集の中の人々が口々に叫んで通つた。ところが、生憎、私たちの一行がそこを通りかゝつた時、可成り大きな地震が鳴つて來た。「あゝ、あゝ、」と女たちは叫びを上げた。私も瞬間、「しまつた、誰か怪我をしなければいゝが、」と思つた。が、急いでその部分を通り拔けようとしても、先

がつかへてゐるので、人々は前を押しながらも走る譯に行かなかつた。丁度私の前に私の母と妻とがゐた。「大丈夫です、大丈夫です、成るべく此方の倒れた家の方を踏むやうにしてお歩きなさい、」と私は母にいつた。そしてその時の地震は可成り長い間搖れてゐた。といふのは、やつと私たちの一行がそこを通り拔けて、電車通の四つ辻に出た時まで未だそれがつゞいてゐた。そしてそこの眞暗な四つ辻のまん中に、進みもならず退きもならないで、小鳥のやうに押し合つてかたまつてゐた無數の群集が、呻るやうな聲で「妙法蓮華經」と合唱してゐた。

漸く室生君の家の前に來ると、百田君も一緒にゐて、彼等はこれから飛鳥山の方へ逃げようとしてゐるところだといつた。が、私は滅多にこゝ迄火は來ないだらう、又來るにしても明日の朝までは絕對に安全だからと勸めて彼等をなだめてから、私たちは彼の家の庭に通してもらつた。その晩は彼の周旋で、私たちの十七人の一行はポプラ倶樂部の庭に野宿した。矢張り晴れた晩で、見ると南の方の空を染めてゐる火は段々幅が狹く色が薄くなつて行つた。そして恐らく夜の十二時頃であつたらうか、火は漸く消えたやうだつた。が、一度消えた火が又燃え上つて、本當に消えたのは明け方頃だつた。

要するに、空前の大災ではあつたが、私は幸ひにして被害は殆どないといつていゝ位で濟んだ、そして恐ろしいといへば恐ろしい思をしたのは、こゝに書いたこの二日間がその主なるものであつたらう。私の友人の或病院附の醫者の話に、今度の事變でレオマチス患者の歩き出したものや、甚しいのは高熱の下つたものや、概して病人でよくなつた者が甚だ多いといふことである、殊に看護婦の勇敢だつたことは無比だつたといふ話である。考へて見ると、私も亦、これから後のことは知らず、臆病といふ病人であつたのが一時あの時にはよくなつたのであらうか。その後、見舞に來てくれるどの友人もどの友人も、遠慮のない人たちは、君がよく腰を拔かしも、病氣になりもしなかつたな、元氣だな、といふ言葉で挨拶した。

（「改造」の求めに依つて——九、十二）

九月一日・二日（その二）

誰でもさうだつたらしいが、私も亦第一回の大震動の間は、家の中にゐて柱や簞笥を支へて抵抗してゐた、そしてそれが過ぎてから家の外に飛出した譯だつた。が、私の友人のS君は、理窟通り、それから後にそれ以上の大地震が來る譯がないと覺悟を定めて、決して家の外に出たり野宿したりはしなかつたさうである。彼は別に剛膽といふ程の性質ではなかつたのだが、極めて意固地者だつた。が、意固地からにせよ、

何からにせよ、地震の一週間ほど後に私が彼を訪問した時、彼が二階の窓から裏手の寺の大きな境内を指さしながら、「どうだ、この寺の垣にくつ附いてゐる家といふ家は、みんな垣根を破つてゐるだらう。僕の家だけだ、垣根がちやんとしてゐるのは。つまりあの地震でそれ〴〵垣根を打ち壞して、寺の庭に避難したんだ、何處の家でも大抵二日位あそこで野宿してゐたよ、」といつた時には少なからず感心させられた。

だが又、地震後十日以上經つた後でも、私は方々の家で、柱時計が十二時前後のところで止まつたまゝであるのを五ケ所以上見た。つまりそれはあの大地震の時に止まつたまゝに違ひないので、人々は今だに時間のことにまで氣を付ける餘裕がないのを示すのであらうか。それは兎に角、十二時を指してゐる止まつた時計の光景は、何ともいへぬ物凄い感慨を起させるものであつた。

何にしても、先のS君のやうな人の場合は特別で、私たちは最初の、そして最大の地震が來た時は唯不意の驚きで夢中だつた。だから、それを無事に免れたのは先づ震災を免れたと覺悟していゝ筈でありながら、却つて家の外に飛出してからの方が餘震の來る度に、次第にはつきりと恐ろしさが感じ出されて來た。誰も彼も神經が極端に過敏になつてしまつたのである。私は家の外に出てから、二三時間ばかり表通の四つ辻に町の人々と一つになつてかたまつてゐたが、づしーんといふやうな地響を立てゝ第四回目、第五回目と餘震が襲うて來るのに遭つた時は、最も物恐ろしい氣がした。これまでよく美濃尾張の大地震に遭つた人に向つて、「あなた方はもうこんな小さな地震は平氣でせう、」と聞くと、「中々どうして、」と彼等が一樣に答へたのを思ひ出した。「あんな地震に遭つて來たからこそ、地震といふと人一倍に吃驚します。」——つまりそれと同じ氣持であつた。私は幸ひにして火災の方は免れたが、今度の火事を經驗した人たちは、行く行くは火事と聞いても、今迄に覺えなかつた恐怖を呼び起されるに違ひない。

さて、私自身が地震に遭つた時のことはもう書いたことなので、その復習をすることは避けるが、一日の夕方、私は餘り火事の噂が激しいので、どんな樣子か見ようと思つて、上野公園の高臺の方へ歩いて行つた。もつとも、私は地震から一時間と經たないうちに、下町の火事の烟の爲に空の太陽が蔽はれて、眞赤に見えたことも知つてゐた。間もなくそれが煙の爲に全然見えなくなつたことも知つてゐた。が、私たちは間斷なしにつゞいて來る餘震の恐怖の爲に、火事のことを未だそんなに重大に考へてゐなかつたのであつた。

ところが、私が火事を見ようとして、公園の鶯谷の廣場の方へ出て行くと、淺草方面からの火事の避難民で、彼等と反對に歩いて行くことが出來ない程、混雜してゐるのに先づ驚

かされた。そこで少し道を變へて、兩大師前の廣場の方へやつとのことで出て見た時、そこから見下ろされる限りの下町が一面に火である光景には、暫くの間呆氣にとられて立ち止まつてしまつた。近頃讀んだ新聞の報告に依ると、同時に八十八ケ所から火が出たとのことであるが、私はその時も未だ、火事は多分本所淺草全體と、その他の一部分位だらうと思つてゐたのである。が、やがて彼方此方で人々が話し合つてゐるのを、聞くともなしに聞いたところに依ると、京橋も、日本橋も、神田も大抵燒けてしまつたといふ噂を耳にした。だが、それは多分噂の性質として、可成り大袈裟に傳へられてゐたのだらうと思つてゐた。そして、丁度日が暮れかゝつて來たので、家の方に向つて、竹の臺から斜めに美術學校の方への草原を横切つて歩いて來ると、神田の丸善の提灯を持つた數人の人々が、そこらの木蔭で野宿の用意をしてゐるのを發見したので、驚いて、「君の方も燒けたんですか、」と聞いて見た。「えゝ、もうとつくに、」と小僧らしいのが答へた。「ぢや小川町の方は?」と聞くと、「無論、もう燒けたでせう、」との答だつた。

私が小川町に就いて聞いたのは、そこに私の中學校以來の友人が開業醫をしてゐて、近頃一週間に一度位づゝ會つてゐた間柄だつたからである。彼は新潟の醫專を卒業して未だ十年にも足らないのに、實直な努力家で、無一文から積み上げて、今ではデアテルミイからX光線の機械まで据ゑつけて、日に日に繁昌しつゝあつたのだ。可哀さうに、燒けたかな、と思ひながら、家へ歸つて來ると、それから一時間ほどした時、彼がいつも診察室に坐つてゐる上着なしの洋服姿のまゝで駈け込んで來た。「燒けたか?」と私が取敢ず聞くと、「燒けた。濟まないが何とかして俥を一臺見付けてくれないか?」といふ。その譯を聞くと、當時、彼の家には入院患者が一人切りしかゐなかつたが、その一人の患者を助け出す爲に、彼と看護婦一人とで、交り交りに背負ひながら、三時間も掛つて上野の山下まで連れて來た、「車夫がゐなければ、俥だけでもいゝから貸してもらつてくれないか、患者をこゝ迄連れて來たいから、」といふのである。

「荷物は?」と聞くと、「多分みな駄目だ、」と彼は答へた。「外の人たちは?」と聞くと、「母と女中とに子供を一人づゝ背負はして、看護婦を一人つけて早く逃がしてしまつた。妻だけは後に殘つて荷物の方の始末をするやうにいつてたが……。」そして、「兎に角、看護婦と病人とを待たしてあるから、」といひ殘して、俥宿から俥を借りて自分で引いて行つてしまつた。

すると、それから三十分程して、その時はもうすつかり夜であつたが、彼の細君が一人で片手に西瓜を一箇抱へて姿を現した。「荷物は?」と聞くと、「みんな表の電車の中へほり

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com